

[原著論文]

倉橋惣三の家庭教育論に関する一考察

——『育ての心』を手掛かりに——

大豆生田啓友

要 約

本論文は、倉橋惣三の家庭教育論について、彼の代表的な著作である『育ての心』を手掛かりに考察したものである。特に、彼の家庭教育論が何を主張し、それが現代の家庭教育あるいは子育て支援において示唆するものは何かを明らかにしようとしたものである。結論として、特に以下の4点を導き出した。①子どもの心もち理解が家庭教育の基盤であること。②子育てにおいて親と子の成長を相互関連的に捉えたこと。③子育ての成果よりも子育てを味わうことを支援することが重要であると捉えたこと。④親の養育責任とともに子育てのみに専念するのではない親の姿の意義をあげていること。

キーワード：倉橋惣三，家庭教育，育ての心

序論—問題意識

倉橋惣三はわが国の「幼児教育の父」と呼ばれ、日本の保育界に大きな影響を与えた人物である。代表的な著作として、『育ての心』や『幼稚園真諦』などがあげられる。

倉橋惣三に関する研究は、保育論および保育方法・内容論のみならず、児童文化論、児童保護論、家庭教育論、宗教教育論（道徳教育論）等、多岐にわたる¹⁾。本論文は、その中でその家庭教育論の現代的意義に焦点を当てて考察を行うものである。

倉橋の家庭教育論について考察したものとしては、森上史朗（1993）が、倉橋のすべての著作を踏まえ、その論点を整理したものがある²⁾。また、倉橋の家庭教育論について論じているそれ以降の代表的な論文としては、志村聡子（2001）³⁾ や、米村佳樹（2000）⁴⁾ があげられる。志村論文は当時の都市部にある受験家族への指導に着眼した研究であり、米村論文は倉橋の家庭教育論の近代的性格を明らかにしようとするものである。どちらも近代化する家庭教育環境に焦点を当てた考察であり、その現代的意義を明らかにしたものではない。

倉橋惣三の家庭教育論の現代的意義に焦点を当てた研究は上記の森上（1993）のものをもっとも代表的である。森上は、次のように述べ、倉橋の代表的著作である『育ての心』の家庭教

育論の意義について述べている⁵⁾。

今日のわたしたちの周囲には、子育てのうえで、あまりにも深刻なたくさん問題が、次々に現れている。それは日本経済の急激な高度成長がもたらした社会のゆがみ、それは教育の問題に、家庭の問題にとのしかかっている。しかし、『育ての心』の原理原則や方法上の導きが活かされていたら、どれほどの親子が、教師が、苦悩を軽くして明るくい育ちあいができるものと思わずにはいられないのである。

現代のわが国の子育てを取り巻く環境は大きく変化している。時代や社会の大きな変化を背景として、子育ての負担感やストレスの増大、虐待、子どもの貧困など、その問題はとても深刻である。このような問題状況に対応するため、社会全体で子育てを支え合う仕組みを作るなど、子育て支援政策も大きく進められている。

しかし、子育てという営みは、時代や社会の変化に応じて変化するものであると同時に、時代が変化しても変わらない不易のものでもある。むろん、倉橋の時代は封建的な子育ての時代であり、現代社会とは大きく異なる。そうではあるものの、大正・昭和初期に書かれた倉橋の代表的著作である『育ての心』が、現代の保育のみならず、現代の子育て（家庭教育）にも生かされると森上は述べている⁶⁾。それは一体どのようなことであろうか。

『育ての心』の家庭教育論の意義については、森上自身はその著書において記しているが、詳細を論じているわけではない。また、大豆生田啓友（2008）「子どもの心に寄り添う喜びを再発見」（『育ての心』文庫版解説⁷⁾）の中においても、一部、『育ての心』における家庭教育論の意義について触れている。しかしながら、そこでは、『育ての心』の保育論も含めた総合的な視点から記したものであり、家庭教育論の特徴について触れるにとどまっている。そこで、本論文においては、保育論として読まれることも多い『育ての心』について、家庭教育論の観点のみに限定して、その現代的意義を明らかにすることを目的とする。

1 『育ての心』の成立・構成

本書は、主に昭和になってから記された数多くの文章の中から倉橋自身が編集して、昭和11年に刀江書院から出版されたものである。本書は、昭和15年には倉橋自身が改訂して18版を出し、戦時中に23版まで刊行されている。その後、改訂版が昭和20年に乾元社から復刊された。また、昭和40年に『倉橋惣三選集』（第3巻）としてフレーベル館から復刊され、さらに昭和51年にフレーベル新書として出版された。新書版では、若い保育者にも読みやすいように漢字を新字体としたり、現代かなづかいに改めたりしたほか、上下巻とし、現代においても広く普及されてきた。近年では2008年に倉橋惣三文庫版としてリニューアルされてきた経緯がある。

上記のように、たびたび出版社が変わったり、改訂された経緯はあるものの、基本的には初版のものとはほとんど変わらず、誤字、誤植の訂正、新字体・現代かなづかいへの対応程度の変更に過ぎない。それは、昭和15年改訂版の序で「貴くもない一句一行ではあるが、著者には著者の愛着があって、そのままにしておくよりほか仕方がない」⁸⁾と述べているように、倉橋自身の愛着の念があることが背景にある。また、昭和20年の再版の序で「此の書の内容が、時に即しての所論所説ではなく、育つものへの久遠の信仰による光明の伝達にはかならぬ」⁹⁾と述べ、23版の旧著をほとんどそのまま出すことにしたことからわかるように、倉橋の子育て論の真理とも言える内容であることをも示している。

2 『育ての心』の特色

倉橋が保育の世界で活躍した前半期に雑誌に書きためたものを集めたものが『幼稚園雑草』であるのに対して、主に昭和になってから書いたものを集めたのが、この『育ての心』である。前半期と後半期という分け方もできるが、『幼稚園雑草』が幼児教育・保育のことが中心的に記されているのに対して、『育ての心』は幼児教育・保育のことのみならず、家庭教育（子育て）について記されている点にその特色がある。

特色の第一はこの点である。つまり、その対象が保育者のみならず、親（母親）や一般の女性を対象にしている点である。その背景には、『幼稚園雑草』の時代と比べ、倉橋の関心や活動が親や家庭教育（子育て）に広がってきていることがあげられる。昭和4年に文部省社会教育官を兼任することになり、家庭教育振興運動にかかわり、全国を東奔西走した倉橋の時代背景とも重なる。

倉橋の家庭教育論を論じるにあたり、『育ての心』において、保育者と親を共通の対象とした構成になっているということが大きな特徴となる。もちろん、保育者と親は決して同じ背景や条件において子どもを育てているのではないが、あえてこれを同じ書籍の中で同じ文脈として取り上げたことに大きな意味があると考えられる。つまり、幼児教育と家庭教育の問題を別物ではなく、共通の基盤のものとして捉えること—それが幼児期の子どもにふさわしい教育のあり方を社会に発信していく上で必要であったと考えたのであろう。

むろん、倉橋が編集発行を行ってきた『婦人と子ども』自体がそうした保育者と親を共通の対象とするスタンスをとってきたのだから、当然のことと言えば、当然である。またこのことは、のちに倉橋が中心にかかわることになる、『保育要領—幼児保育の手引き』（文部省・昭和23年）において、幼稚園・保育所・家庭を共通の対象にしていることにも通じている。

さて、特色の第二には、多様なエッセイスタイルで記されている点があげられる。倉橋自身が「序」に記しているように、本書は「体系を辿って書いたものではなく、「子どもと母たちに接しながら、その実際と実践のままに即して書いた実感の書」であり、「児童と教育に対する根本の心もちを、なるべくなまなましく描き出すことを意図して編集されたものである。

しかも、「時を異にして、所を別にして、著者の姿勢は必ずしも一つでなく、「或いは語り、或いは答え、時にはまた、教えている」とも述べられている¹⁰⁾。

このように、本書はバラエティに富んだ内容や表現方法で構成されている。それは、倉橋自身が子どもとのかかわりの中で感じた繊細な詩的表現による子どもと保育者論が一つの基盤にある。また、家庭での日常生活を背景にした家庭教育論、母親への悩み相談に回答するような形態で表現された子ども理解と子育て論、名画を通しての子ども論があげられる。

本書はこうしたエッセイスタイルであり、実感を通した内容であるため、倉橋自身の温かく情緒的な人間性を垣間見せてくれるものとなっている。また、自身が心で感じたことを言語化した内容であるために、読み手は向こう岸の問題ではなく、読み手自身が目の前の子どもをイメージできる。そして、自分のかかわりを深く省察させ、子どもの愛おしさの再発見へと誘うといった独自性を有している。これが、昭和初期から時代を超えても色あせることの少ない本書の魅力であると、これまでも論じられてきた¹¹⁾。

津守真は倉橋のこうしたスタイルをとる保育論について、「直観的洞察をもって示した」、「日本の幼児教育界の与えられた大きな遺産であると思う」と述べている。それはつまり、「相手に対する同感、子どもの姿に驚く眼、子どもと互いに通じあう気持ち、このように、おとなが子どもと内面的に交流することができるようになるために、日本的な直観力は非常に役立つもの」であろうという¹²⁾。

単なる理論的枠組みで述べられたのではなく、直観的洞察から目の前の子どもを実感的に表した本著は、子どもにかかわる万人（つまり、保育者にも親にも）に伝わるスタイルであったとも言えるであろう。ここに、『育ての心』の大きな特色がある。

3 子どもの「心もち」への理解が子育ての基盤

これまで述べてきたように、『育ての心』は保育者と親を共通の対象にしたものであり、保育者を対象に書かれている内容のものではあっても、それが家庭教育においても共通の基盤として捉えることができる。そこで、まずは本書が示す基本的な保育・家庭教育の基本姿勢について整理しておきたい。

本書の最大の特徴は、これまで、森上史朗や津守真らも述べてきたように、子どもの生きた事実に基づいた子どもの「心もち」の徹底した理解にあると捉えることができる。それは、本書の代表的な文章でもある「子どもたちの中において」の中で最もその基本的姿勢が詩的表現によって記されているが、その他「子どもの心」というやや論理的に書かれた記述があり、そのほとんどにおいて、子どもの「心もち」の理解という1本の強い線で貫かれていることがわかる。

倉橋にとって、「子どもの心もちを理解する」とはどのような意味であろうか。「こころもち」という文章をここで取り上げてみたい¹³⁾。

子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。

子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。濃い心もち、久しい心もちは、誰でも見落とさない。かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと俱にいる人である。

心もちは心もちである。その原因、理由とは別のことである。ましてや、その結果とは切り離されることである。多くの人々が、原因や理由をたずねて、子どもの今の心もちを共感してくれない。結果がどうなるかを問うて、今の、此の、心もちを諒察してくれない。殊に先生という人がそうだ。

その子の今の心もちにのみ、今のその子がある。

「心もち」とは、「心の持ち方。気立て。気持ち」などの意である。単に「心」や「気持ち」ではなく、「心の持ち方」といった、よりその子の心の持ち方あるいはその情緒性に重点を置いた意味を持つ「心もち」という言葉を好んで用いているところに、倉橋の意図を感じる。その意味は、「こころもち」の次に掲載されている「廊下で」という文章を読むことで、具体的に理解することができる。

そして、この子どもの「心もち」は「極めてかすかに、極めて短い」とあるように、子どもの心もちとは、子どもの行為に現れるごく繊細で、小さな、わかりにくい中にあるものであることといった重要な性格が記されている。その繊細さのため、大人にとっては、非常に見落とし安いものである。だからこそ、それを見落とさない大人だけが、「子どもと俱にいる人」であると述べている。

しかも、「心もちは心もち」だとし、「原因、結果とは別のこと」で、「その結果とは切り離されること」だという。つまり、「今の子どもの心もちにのみ、今のその子がある」のだから、「子どもの今の心もちに共感」することが大切だと述べているのだ。こうした共感的理解は、当時の心理学的理解とは異なることを、本書の「子どもの心」の中の「子どもの心もち」で述べている。それは、心理学が子どもの心理を分析的に知るのに対して、「味わい触れてやること」「そのひびきを聴いてやる」ことが大切だということである¹⁴⁾。

こうした姿勢は本書すべてに貫かれており、「子どもの癖しらべ」「いろいろの子ども」「子どもの相手」などの親に向けての子育て相談に応じたスタイルの中においてもそれが繁榮されている。

4 子どもとの関係性において成長する親

『育ての心』にみられる倉橋の保育・家庭教育論の基盤のもう一つとして、子どもがみずか

ら育とうとする主体的存在であると同時に、それを育てようとする養育者もまた子どもとの関係性の中で相互的に育ち合う存在であることが記されている点があげられる。この点については、「序」の冒頭に記された次の有名な文章に象徴されている¹⁵⁾。

自ら育つものを育てせようとする心、それが育ての心である。世にこんな楽しい心があるか。それは明るい世界である。温かい世界である。育つものと育てるものとの、互いの結びつきに於て相楽しいでいる心である。

(略)

しかも、この心情が最も深く動くのは親である。次いで幼き子等の教育者である。そこには抱く我が子の成育がある。日々に相触るる子等の生活がある。斯うも自ら育とうとするものを前にして、育てずにはいられなくなる心、それが親と教育者の最も尊い育ての心である。

それしても、育ての心は相手の心を育てるばかりではない。それによって自分も育てられゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等の心を育てて自らの心も育つ教育者。育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である。

この短い「序」の中に、『育ての心』すべてに貫かれる倉橋の考えが記されていると同時に、現代の子育て・保育、発達研究の成果にも通じる視点が示されている。

まず、倉橋は子どもを「自ら育つもの」として捉えている視点があげられる。このような捉え方は、近年の発達心理学等における研究の成果の傾向、あるいは「有能な学び手としての子ども」として捉えるような方向性とも重なる¹⁶⁾。続いて、「育つものと育てるものとの、互いの結びつきに於て相楽しんでいる心」とあるように、ここには特定の養育者との間に親密な愛着関係を形成することが大切だとしたボウルビィのアタッチメント理論との共通性が見出せる¹⁷⁾。

そして、「我が子を育てて自ら育つ親」とあるように、自ら育とうとする子どもへのかかわりの中で親自身も育つという相互的主体性の原理が記されている。これは、鯨岡峻らの「関係発達論」などの視点にも共通する¹⁸⁾。

本書の「母ものがたり」にある「母の誕生・母の成長」の中で、母親の成長について詳しく触れられている。「どの子の母もその子の誕生と共に誕生する」¹⁹⁾と述べているように、そもそも子どもの誕生は同時に母親の誕生でもあると言う。まずは、母親としての誕生から述べられていることも重要である。

その上で、「成長するのは子ばかりではない」とし、子どもの成長と共に母親としての成長があるという。その母親としての成長は、「わが子を愛育する中」―「子を育てる母の苦勞、母のよろこび、それらを見ずから体験」―でなされるという。そして、「わが子のためが自分のためになるのが母の生活である」と同時に、「自分のためがわが子のために帰着するのが母

の生活である」と述べている²⁰⁾。「わが子のため」に母親を生きることが強調されることが時代背景にあって、「自分のためがわが子のために帰着する」とした視点は現代の子育て支援の視点にも通じるものである。子どもの主体を重視する倉橋が、母親の主体をも重視するという視点は現代の子育て支援を考えるうえでとても新しい視点である。

5 「教育的」である親の問題性

「母ものがたり」の「教育的な、余りに教育的なおっかさん」という文章の中で、「教育的」な母親の問題性が指摘されている。倉橋は「教育的」であることは大切なことではあるのだが、ここで言う「教育的」とは「やたらむしように教育的になり過ぎたりする」ことだと言う。本来、「自然の関係」である「親ごころ」が大切なのであるが、「親も余りに教育的に神経質になったり、理屈づめになったり、科学的になったりさせられると、折角の親ごころの自然よりも、教育的という意識や技巧が打ち勝ってしまっ」、²¹⁾「教育的」になってしまうと述べている²¹⁾。

そして、「今日の社会には、殊に所謂インテリ社会には、そういう類の多くある」と述べている。これはまさに現代に通じる問題である。情報社会である現代においては、当時よりもはるかにこうした「理屈」や「科学的」な情報があふれており、「教育的という意識や技巧が打ち勝つ」社会になっていると言える²²⁾。

倉橋は、先の述べたように「自然な関係」である「親ごころ」が大切であると述べるとともに、以下のように「親を味わう」こと、「自分に生々しく触れてくる親の心」の大切さを述べている²³⁾。

ちと極端ないい方かも知れないが、子というものは親から教育を与えられたいなどは願っていない。願っていることは、親その人を与えられたいことだ。親が欲しいのだ。親が味わいたいのだ。自分に生々しく触れてくる親の心を何よりも求めているのだ。家庭教育というとむずかしく、親の方からの言葉に偏するところがある。教育的お母さんは、わが子を教育しようと、こっちの考えのみに焦って、わが子の真に求めるものを与えない。

そして、「親心のない親はいないのに、何故そうしたことになるのか」と自ら問いを立て、それは「結果のよくなることに心を奪われるためであろう」と述べている。そして、「よい子、えらい子にしたい。それはどの親にもあるが、²⁴⁾「わが子を育ててゆく途中も楽しみな筈である」が、それを「感じられない」。子どもと共に生活する中で、その生活に触れながら、「もっと濃やかなところで味わえない」ところに問題があると言う²⁴⁾。これもまた、成果主義・効率主義の強い現代の子育てにおいては、なお大きなものであろう。

さらに倉橋は、母親たちがそうした「教育的」な傾向になりがちな背景要因として、次のように述べている²⁵⁾。

しかも亦、なぜまた母をそういう風にさせるか。問題がここへくると、われわれの責任にもなってくる場所があるかも知れない。家庭教育の必要のみを説いて、家庭教育の味わいを語ることも少なく、親の責任のみを求めて、親の楽しみをいうことも少なく、子どもといえば、教育の対象としてのみ眺めて、もっと普通の人間的になまなましい対象として思うことの少ない、われわれ当世式科学主義にも、その一半の責任があるかも知れない。それにしてもそんなことに負けるおっかさんはなさない。

ここで倉橋は、自分たち専門家の責任をあげている。家庭教育の重要性や親の責任のみを強調することが中心となり、子育てそのものの楽しみや味わいを伝えることが少ないことの問題性を指摘する。子どもを教育の対象とするまなざしや科学的知見の提供にも問題の一端があるという。これもまた、現代に通じる問題である。

6 家族と母親の役割について

倉橋は家族の機能についても重視している。たとえば、「母ものがたり」の「家庭集会」の提唱では、「家庭生活を更生するに有効な実際方法の一つとして、家庭全体が願わくば毎日一度、またせめて数日に一度くらいは打揃って顔を合わせる機会を持つようにしたい」等と述べている。こうした家庭集会を通して、「互いに家庭生活の楽しみを感じ、互いにいたわるといようなことが自ら出てくる」ことや、「相談ではない相談、打ち合わせでない打ち合わせといようなものが必ず出来てゆく」とのことである²⁶⁾。

その一方で、同じ「母ものがたり」の中の「愛育方針の家内統制」においては、「子どもの愛育方針」に「不一致があってはならない」と言う。そして、「おばあさまは、知識もある、経験もある。しかし、肝心の自己責任感は孫に対しては直接ではない」とし、「普通の場合として、間接の位置にいられることがおばあさまのお任せである。その、おばあさまのものであってはならない直接の自己責任感は、どこまでもお母さんに、いくら若くても、是非しっかり持たせなければなりません」と述べている²⁷⁾。次の「ほいほい子問題」という文章でも、「人手が多いと、ついお母さんの養育主任たる責任がうすくなる。その為に、我が子を育てる自覚力、自信力というものが出来難い」²⁸⁾と述べ、母親の養育責任に対する意識形成の問題を重視している。

この時代は、大家族が一般的で、祖父母のみならず家族全員が子育てに関与することも多かったであろう。倉橋はそうした家族内における子育ての協力機能が大切であると述べる一方で、親（母親）の子育ての直接的な責任とその意識形成を強調していることがわかる。子育ての社会化が進められる現代社会にあって、親の子育て責任についてはあらためて考えさせられることである。

しかし、倉橋は母親の役割を一面的に捉えているわけではない。それは、同じ「母ものがた

り」の「まむき 横顔 うしろ姿」からわかる。倉橋は家庭教育の要諦三態として、「まむき」「横顔」「うしろ姿」をあげている。「まむき」とは、母親が赤ちゃんを抱っこしたり、授乳しながら見つめるようなかわり、子どもの遊び相手になってやるかわりなど、親子が一つに結びついた重要なかわりである²⁹⁾。

次の「横顔」は、母親が家事などで懸命に働く中で見られる横顔のことである。「家庭教育は、言葉よりも事実の教育である」と述べ、「忙しい母の方が、かえって忙しい中に籠ったまむきを与えるものである」とし、「こういうところに、家庭教育、人間生活そのものの妙味がうかがえる」と述べている。母親は単にいつも真正面から子どもに向き合えばいいということではなく、親自身が生活に向き合っている横顔もとても大切であるという³⁰⁾。

最後の「うしろ姿」は、「或る日母は講習会へ行く事を告げて家を出た」といった例があげられているように、母親が自分のために子どもから離れて時間を過ごすことを指している。そして、「そのうしろ姿の力は、恐らくは、まむきで説き、よこ顔で教えるよりも、更に深い何かを与えるものでなければならぬ」と述べている³¹⁾。

母親の「うしろ姿」とは、ここでは修養の本を読む例と講習会に出ていく例があげられているが、現代において解釈すれば、外に働きに出ていく姿とも言えるだろう。家事労働では横顔が見えるが、会社に仕事に行くとすると、外に出ていく「うしろ姿」しか見えないことになる。しかし、それが「更に深い何かを与えるものでなければならない」と述べていることは、当時としてはとても進歩的であると言えよう。

「横顔」および「うしろ姿」をも含めた母親の役割を通して、ここには単に子どもと向き合うだけの母親ではないことの大切さが読み取れる。そこには、母親一人で子育てするのではないことをも包含していると言えるであろう。良妻賢母が求められる時代にあって、こうした教え方が生まれた背景には、学問好きであった倉橋の母・とくの影響があったと考えられる³²⁾。そして、在外研究員として欧米に派遣された見聞きしてきた倉橋自身の経験もあったのかもしれない。

また、ここで父親についても触れている。倉橋は「よこ顔」について記す中で、父親について次のように述べている³³⁾。

(略) 我が子よりも事業の方に多く関心をもち、或いはもたなければならぬことの間にある父親、我が子の直接のことは自分でしないで誰かがするものと決めている父親は、家庭の中でも我が子へよこ顔ばかり見せていることが多い。それが正しい父のよこ顔として許さるべきか否かは別として、母までそんなよこ顔をされては以ての外である。

父親に関する記述はほとんどない中であって、貴重な文章である。実際には、子どもに真正面から付き合うことの少なくなりがちな当時の父親の実態が垣間見える。倉橋としては、「許

されるべきか否かは別として」と明言は避けているものの、「母までそんなよこ顔をされては」という記述と合わせて読むことにより、ほとんど横顔しか見せない父親に対して批判的なスタンスに立っていることを読み取ることができる。倉橋の父・政直は花づくり・木工など多趣味でありながら、小さな惣三のために園芸具や大工道具一式を与えたことからわかるように、子どもと付き合う人であったことを考えると、倉橋自身はそうした父親像をよい姿としてイメージしていたのであろう。そのように考えるならば、この家庭教育の三態は、父母問わず、共通に大切な三態と言えよう。

結論

倉橋惣三の著作『育ての心』に見る家庭教育に関して、現代との関連からその特徴および意義を明らかにすることを目的に論じてきた。その特徴をまとめると、以下の4点が言える。本研究において、拙稿「子どもの心に寄りそう喜びを再発見」では明確にできなかった、家庭教育論の視点に焦点をしばった『育ての心』の現代的意義を明らかにすることができた。

- (1) 子どもの現在の心もちを理解しようとするのが、家庭教育においても重要であること。心もちに寄り添う姿勢が親への子育て相談においても通じている。
- (2) 母親（親）は子どもの誕生と共に誕生し、子どもの成長との相互関連性の中で成長するものであること。子どものみならず、主体としての親（母親）の存在にも注目していることの意義は大きい。親のためが子どものためでもあるとする関係論的視点は、現代の子育て支援にも通じる。
- (3) 科学的知見ばかりが言われることで、子育ての教育的な結果や成果ばかりに捉われ、子どもを育てることを味わえないことが、「教育的」（教育過剰）な親を生み出す。その背景には、子育てを味わうことの魅力を伝えられない専門家の責任もあることは現代にも大きく通じる。
- (4) 家族の子育て機能が重要であると同時に、親の養育責任の意識が重要である。また、親（父親も含め）には単に正面からのかかわりだけでなく、横向きのかかわり、後ろ姿のかかわりも大切である。これは、これまでの封建的な子育て観や良妻賢母の子育て観とも異なる視点を有している。今日の親の仕事と子育ての両立を考えていく上でも重要な指摘である。

おわりに

本論文では、『育ての心』の「序」「子どもたちの中に」「母ものがたり」「子どもの心」が中心に考察がなされ、その他の内容については十分吟味できなかった。特に、「子どもの癖しらべ」「いろいろの子ども」「子どもの相手」等の親の相談に応じるような内容のものについては、ほ

とんど詳しい考察ができなかった。森上が言うところの「原理原則」的なものについてはある程度考察できたが、「方法上の導き」については今後の課題としたいところである。

注

- 1) 森上史朗『子どもに生きた人・倉橋惣三—その生涯・思想・保育・教育—』フレーベル館, 1993年
- 2) 同上
- 3) 志村聡子「倉橋惣三における「家庭教育の脱学校化」論—都市部の「受験家族」への指導に着目して」日本保育学会『保育学研究』39(2), pp.160-167, 2001年
- 4) 米村佳樹「倉橋惣三の家庭教育論—その近代的性格」小平記念日立教育振興財団日立家庭教育研究所『家庭教育研究所紀要』(22), pp.32-41, 2000年
- 5) 森上, 前掲書, p.350
- 6) 同上, pp.358-359
- 7) 大豆生田啓友「解説 子どもの心に寄りそう喜びを再発見」倉橋惣三『倉橋惣三文庫④育ての心(下)』pp.231-241, 2008年
- 8) 倉橋惣三『育ての心(上)』フレーベル館, 2008年, p.7
- 9) 同上, p.10
- 10) 同上, p.5
- 11) 森上史朗「解説」亀高京子・石川寛子監修『家政学生活学研究基礎文献集第8巻「新版 育ての心」』大空社, 1988年, pp.3-5
大豆生田啓友「解説 子どもの心に寄り添う喜びを再発見」『育ての心(下)』pp.233-234
- 12) 津守真『子ども学のはじまり』フレーベル館, 1979年, p.262
- 13) 倉橋前掲書, p.34
- 14) 倉橋惣三『育ての心(下)』フレーベル館, 2008年, pp.8-9
- 15) 倉橋(上)前掲書, pp.3-4
- 16) 大宮勇雄『保育の質を高める—21世紀の保育観・保育条件・専門性』ひとなる書房, 2006年
- 17) 森上前掲書「解説」, pp.5-6
- 18) 鯨岡峻『関係発達論の構築』ミネルヴァ書房, 1999年など
- 19) 倉橋(上)前掲書, p.75
- 20) 同上, pp.76-78
- 21) 同上, pp.79-80
- 22) 同上, pp.80-81
- 23) 同上, p.83
- 24) 同上, pp.83-84
- 25) 同上, p.84
- 26) 同上, pp.105-108
- 27) 同上, pp.94-95
- 28) 同上, p.100
- 29) 同上, pp.123-127
- 30) 同上, pp.127-129
- 31) 同上, pp.129-131
- 32) 森上前掲書, pp.20-23
- 33) 倉橋(上)前掲書, p.129

A Study about the Theory of Home Education by Kurahashi Souzo: Discussed with the Clue to “SODATE NO KOKORO”

Hiroto \bar{m} o ŌMAMEUDA

Abstract

In this study, the theory of home education by Kurahashi Souzo is discussed with the clue to “SODATE NO KOKORO” which is his important work.

Especially, it is going to clarify what his theory of home education insist on and what it suggests in the modern home education and the parenting support.

The following four points were derived as a result.

- ① To understand the emotion of the children is a basis of home education.
- ② He perceives, in child-rearing, growth of both parents and children is in correlation.
- ③ He perceives it is more important to support to enjoy the child-rearing itself than to support to get good results in child-rearing.
- ④ He points out that are very important both parents' responsibilities for child-rearing and parents' attitude not only to concentrate on child-rearing.

Keywords : Souzou Kurahashi, home education, parenting support